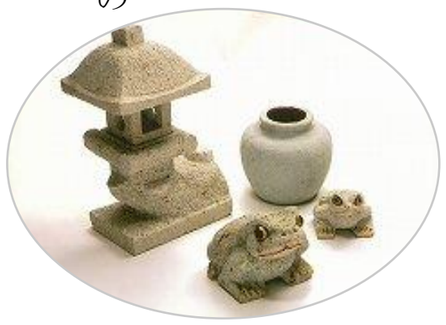
ぼくのじまんの町

○　石のまち　大谷

編：宇都宮市教育委員会（道徳科地域教材）

まさはるは、「大谷石」の産地である大谷町に住んでいる。お父さんは、大谷石をけずって工芸品などに加工する仕事をしている。夏休みが終わりに近づいたある日曜日、まさはるの家に、お母さんの会社の友人エミリが遊びに来た。エミリはアメリカ出身で、二年前から宇都宮に住んでいる。



「こんにちは。」

「いらっしゃい、エミリ。暑かったでしょう。」

お母さんは、さっそく冷たい麦茶を用意しテーブルに運んだ。エミリは、コップの下のコースターを手に取り、めずらしそうに見つめながら、

「あら、すてき。これは石なの？　そういえば、ここへ来るとちゅうに、石でできたへいや建物をたくさん見たわ。どうして、いろいろな所に石が使われているの？」

と、聞いてきた。

「それは大谷石だよ。エミリが見た物は、この町でほり出した大谷石で作られているんだよ。」

ソファにすわってゲームをしていたまさはるが言った。

「えっ！　まさはるの町に、この石があるの？　見てみたいな。」

（そんなにめずらしいかな・・・。　どこにでもある石なのに。）

まさはるは、ふしぎに思った。

すると、そばで話を聞いていたお父さんが、

「よし！　エミリに大谷の町を案内してあげるとするか。

まさはるも行くぞ。」

と、はりきった様子で話しかけてきた。

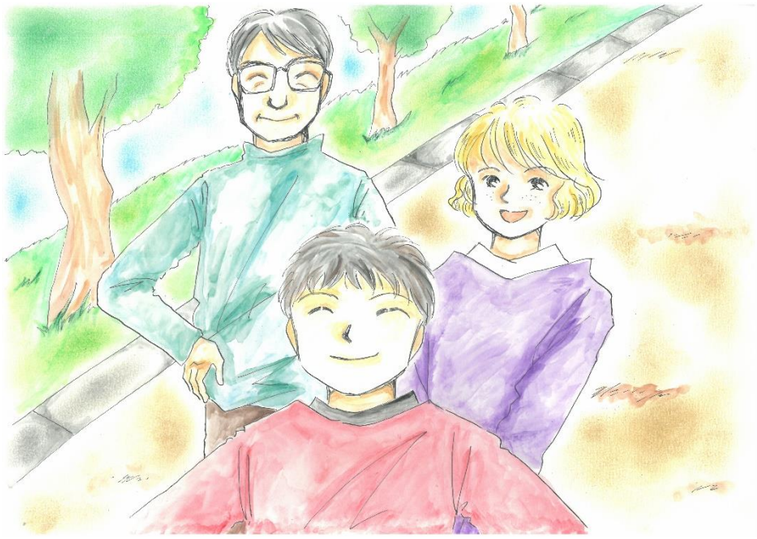
「ええ、ぼくも行くの？　う、うん・・・・・。　わかったよ。」

まさはるは、ゲームの画面を見ながら、しぶしぶ返事をした。

さっそく、お父さんは、二人をつれて「大谷資料館」にむかった。まさはるは、小さいころに一度行ったきりで、よく覚えていなかった。資料館の近くは、多くの観光客でにぎわっていた。

資料館地下入口から入ると、中は、ひんやりとした空気につつまれていた。目の前には、巨大な空間が広がっていた。辺りを照らすうす明かりの中、三人は、長い階だんを下りて行った。柱と柱の間を曲がると、同じような景色がまた目の前に広がっている。

「うわあ、すごい。めい路みたいだ。どこまで続いているんだろう。」
いつの間にか　まさはるは、三人の先頭に立って歩いていた。
「いったいどこまで続いているの？　どうしてこんな場所ができたの？」
エミリはびっくりした様子でつぶやいた。すると、お父さんは、
「ここはね、今は、資料館になっているけれど、百年くらい前から、大谷石をほり出していた場所なんだよ。機械化されるまでは、一本一本手作業で石を切り出して、百キログラムくらいの石を背負って、運び出していたんだよ。かべを見てごらん。線のようなみぞは、ほり出したあとだよ。昔の人は、一本の石を切り出すのに約四千回もつるはしをふるったそうだよ。」
と、話してくれた。まさはるとエミリは足を止め、かべや高い天井を見わたした。
「四千回も・・・。　昔の人はすごいな。ぼくにはぜったいできないよ。」
「大変な仕事だったのね。ほり出した石は、何に使ったの？」
「石べいや蔵、教会などの建物、神社の石がきや鳥居など、いろいろな所に使われたんだよ。大谷石は、軽くて火に強いから、宇都宮だけでなく日本全国に出荷されたのさ。あっ、そうそう、大きい物だけでなく、家のげんかんにおいてあるカエルも大谷石をけずって作ったものだよ。」
「そのカエルの置物は、お父さんが作ったんだよね。」
と、まさはるは、じまん気な様子で言った。
「すごい。まさはるの家にもどったら、そのカエルをよく見せて。」
「オッケー。他にも、大谷石をけずって作った物があるから見せてあげるよ。それにしても、ここは、ものすごく広いなあ。」



大谷資料館

「そうだね。今、この場所は、コンサートや映画のさつえいにも使われているんだよ。」
「えっ！　ここで。ぼく、知らなかったよ。」
「さあ、次は大谷寺に行ってみよう。千二百年くらい前に大谷石のかべにほられた観音様を見に行くぞ。」
「うん。」
まさはるは、はずんだ声で返事をした。エミリに大谷の町を案内していたら、自分の町がとてもほこらしく思えてきた。
「お父さん、早く行こう。ぼく、大谷のことをもっともっと知りたい。」